



第 17 号

平成 6 年 3 月

編集・発行

長崎県立対馬歴史民俗資料館
 数寄屋町今敷 817
 郵便番号 817
 電話 (09205) 2-3687

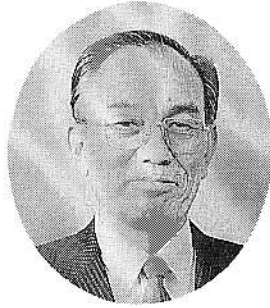
印刷所

長崎市栄町 6-23
 昭和堂印刷
 電話 (0958) 21-1234

あいさつ

長崎県立対馬歴史民俗資料館長

中山恒夫



故宗武志先生には、御多用の中、遠路御来島賜わり、「対馬の文化について」御講演をいただきました。

慈愛に満ちたお姿とともに、対馬によせられる先生の熱い思いに溢れるお話を感銘深く拝聴した事は、記憶に新しいところであります。

本館が昭和五十三年十二月に開館しましてから、本年でちょうど十五年経過いたしました。この間、皆様方より寄せられました数々の御支援御協力に対し厚く御礼申し上げます。

昭和五十八年九月には、開館五周年記念行事として、「対馬宗家資料展」及び講演会を開催いたしました。

また、昭和六十三年七月には、開館十周年記念行事として、「対馬くらしの資料展」を開催し、多くの方々御来館をいただきました。

本館には、宗家文庫(三二、八二九冊)を中心に、地方文書(四、七八三冊)、島庁資料並びに文書(七八四冊)、経典(八〇八巻)、考古資料(二七、一一五点)、美術・工芸

(三〇四点)及び民俗資料(一、二二六点)を収蔵し、その一部を一般に公開すると共に、古文書等については、関係者の方へ特別開示をし、その研究推進に供しているところであります。

さて、本年度は、皆様方の御要望に応え、平成五年四月より、日曜日祝祭日も開館することにいたしましたところ、入館者数は例年より増加いたしました。とりわけ、小中学生の社会科学習や、個人・グループでの利用活用が増え、職員一同、喜んでいるところであります。

宗家文庫のうち、未調査の「一紙文書」につきましては、「宗家文庫書簡類調査委員会」を設け、調査年次ごとに仮目録の作成作業を進めております。さらに、寛永年間の「毎日記」を中心に「裏打ち補修」をいたしておりますが、いずれも膨大な資料を一枚一枚、手作業でいたしましたので、気の遠くなるような時間と

手間がかかることは必定です。しかし、職員一同、完成の日を目指し鋭意努力をしているところでです。

対馬藩の大先達、雨森芳洲先生の「交隣提醒」を紐解くまでもなく、師の「誠の心」が対馬人の心に脈打ち生き続けているように、対馬には多くの貴重な文化遺産が先人達の努力により継承され今日に至っております。これら先哲の偉業と遺産を学ぶことによって新しい文化の創造に資することになれば本館設置の意義も深まることと信じ、更なる努力を続ける所存であります。

どうぞ、御気軽に御利用くださるようおすすめます。

最後に、皆様方のあたたかい御協力、御援助をお願いし、ごあいさついたします。



日奥上人

大畠精一

ことの起りは文禄四年(二五九五)九月二五日に始まる。豊臣秀吉が京都方広寺に先祖追善のためと大伽藍を建てた。これは権力の誇示と、意のままならぬ宗教団体に対する懐柔の姿勢であり、大仏建立により国主は仏法を保護していると僧や民衆に思いこますためと、副次的には民間の武器を掃させ武家政権の安定をはかる、いわゆる刀狩り施行を大儀名分とするなどの憶測もある。秀吉は九月二五日盛大な開眼供養に全宗派から僧侶を招き齋を設ける千僧供養を行うこととした。各宗各派から多数の僧が参じてきたが日蓮宗の妙覚寺だけは出席を拒否した。住職の日奥は法華経を信じない秀吉に対して「誹法者だ、権力に屈してはならぬ」とし「日蓮の教えの根本『法華経』を所依せぬ者のために供養してはならぬ」との理由であった。信者以外には布施を受けず、施さぬ『不受不施派』の創始より日蓮宗の分裂を招いたのはこの時にはじまる。

日奥は永禄八年(二五六五)京都町衆の豪商辻藤兵衛の子として生まれ

た。十歳までの記憶は定かでない、その後この妙覚寺に入門する。師日奥は幼い稚児にも容赦なく給仕、行法、学問を仕込んだ。文禄元年(二五九二)師の遺言により二八歳で寺を嗣いだ。秀吉が聚楽第にあつて征韓令を出し半島攻略の準備におおわらわの時であった。千僧供養当日檀家衆や寺家衆は入れ代り立ち代り現われ、出仕するよう責めたてたがあくまでも日奥は拒み、遂に妙覚寺を出る羽目になった。鷲山坊・忠清・忠次郎・教夢・立味・道法の六名が供人で嵯峨野に向かうが地下役人の手は嵯峨野、難冠井と行く先々にのび、どこも安住の地でありえず一人去り三人去りして鷲山坊・忠清の二人になる。京都所司代板倉伊賀守勝重と寺社奉行前田玄以の好意により勝重の領地丹波小泉に落着くと忠清を説得して京に帰し、鷲山坊が日奥の身の回りのことや日常の雑事一切を一人で引受けた。ちなみに文禄五年(二五九六)七月二二日大震災により方広寺大仏殿は大破し、大仏が倒壊し、その二年後慶長三年(二五九八)八月

一八日太閤秀吉が薨じた。日奥を憎む受派僧の画策により翌四年一月二〇日家康は不受派日奥・日禎と受派日統・日紹とを大阪城へ召し合わせ討論させた。日奥は頑なに他宗を排斥し家康の聲譽を買い、遂に流罪遠島を申付けられた。浄土信仰で浄土宗外護に篤かった家康には、ようやく落着始めた人心を惑わす邪僧でしか無かったのであろう。翌五年五月の晦日、内府家康より正式の使者が対馬遠流決定をもたらす。六月二日早朝、日奥を乗せた粗末な駕籠は上使一行に守られて小泉を発ち、その日のうちに大阪へ着いて信者、弟子僧らに見送られ、八日には対馬に向かう小船に乗込み、土用炎天の真最中を一八日かかって六月二六日厳原に入港した。時、三六歳であった。

対馬にきて山陰のこわれかけた空寺竜女院で一年程は「知る人となき無仏の孤島」と嘆き、一人ひっそりと暮らしたが、翌年鷲山院が見舞に訪れたまま腰をすえ、日奥の手足となりもう一人弟子日習もふえて来島三年後には、低い丘の中腹にある閑静で小綺麗な造りの住居を藩主宗義智より贈られて日奥はここを宮谷草庵と呼び、仏縁の島での暮らしは人間らしく僧侶らしくなる。

藩主宗氏の扱ひも懇であり特に柳川豊前守智永夫妻の信仰も深く、かなり多くの人々を教化もし、開基となつて国昌寺を建て、以前には見られなかった柔和な面差しを見せ、別人の様に変わっていった。

一二年経つたある日豊前守が参勤のため江戸出府の挨拶に庵を訪れ、途中立ち寄る京に「何かあればお取次ぎを」との申出に、日奥「来年は御赦免になつて上洛致すやも知れませぬ故」と応えた。豊前守は呆れ顔で「大御所様」一世の間は、お帰りになどお諦め下され」と気の毒そうに目を逸らしたが、後に「なんという不思議な符合であるう」と思うことになる。明けて慶長一七年(二六一二)正月四日豊前守が江戸へ出立したその夜駿府で事件が起きた。日奥赦免、船を仕立て京都へ送り届けられるべき旨、と家康が豊前守への急使を出し日奥への書状を持った飛脚も対馬に向かった。勝重より元豊へあてた日奥赦免状は左の通りである。

「先日、儘不_レ懸_二御目_一御床敷存候 随而京都妙覚寺住持無_レ之付而寺中迷惑之由何_ニ年寄衆江申候處前住持対馬_一被_レ居候、我等為_二心得_一可_レ有_二帰寺_一様各被_レ申候

早々貴公方対馬守殿江被_二仰届_一無_二相違_一日奥帰寺

(この地は永禄九年(二五六六)前の島主宗義智が付近一帯を開拓し、のちに別館を建てて隠居所とした白川屋形跡である(宮谷ノ記)より)

可レ然存候様子之儀者宗哲
法印茂存知之事情 尚以レ
面可ニ申達一候 恐惶謹言

慶長十七^{壬子}正月七日

板倉伊賀守勝重判

元豊老人々御中

尚々其由日奥へ茂可レ被ニ
仰越一候以上

(日奥聖人御消息集による)

日奥は四月上旬藩主が仕立ててく
れた船で帰洛の途についたのである。

その後様々に変遷があり、まず家康
が元和二年(一六二六)四月一七日、
七五歳で病死する。

妙覚寺再建なども尽力していたが
寛永六年(一六二九)受派は不受派の
非をならす上書をつくり幕府に提出、
不受派の答書を求めた。全く相容れ
ない双方の主張に幕府は両派に對論



日奥蟄居の宮谷草庵跡

を命じた。もう日奥は往年の激しさ
を失っており、病気がちで六六歳の
年齢と長年の労苦とが、さすがに円
みをもたせていた。時、寛永七年(一
六三〇)三月一〇日己の定命を悟り臨
終の儀式を日要に命じ、まるで午睡
を樂しむ如く此の世を終わった。

對論の裁決は二か月以上も経ち家
康が裁いた先例を以って、政治的解
決がなされ同年四月二日再び日奥を
對馬に流罪せよとの幕命が下った。

位牌は縛され、小船で對馬に流さ
れた。(死後の流罪)
再流罪命令が、その後どう処理さ
れたか今だに不明であり、遺体はど
こに埋葬されたか、いや埋葬をも定
かでない。

積孫日学が昭和十五年(一九四〇)
に建てた碑が宮谷草庵跡に静かに
立っている。

対馬藩の教育

— 藩立学校思文館を中心として —

三浦忠和

江戸時代、対馬藩では岡山藩と共に
全国にさきがけ、貞享年間に藩立
小学校を創設し、明治維新の世まで
学校教育を継続したことは、前号で
紹介した通りである。

この長い間の江戸時代において、
江戸中期の宝暦年間頃より、対馬藩
の財政も困難を極め、幕府からの賜
金を必要とした。それにも拘らず、
歴代藩主は率先して儉約奨励に努め
るとともに、令達をもって領内の学
事振興に奔走したのである。

そのような中で、明和の時代にな
ると、向学気運発祥の時世に至り、
往來の天下り式の奨励法でなく、い
わゆる下情上達の盛り上った時代に
なりつつあった。しかし、当時の国
内事情は災害や不況などの影響で、
藩の財政は極度に悪化の傾向を強め
ていった。

第二十九代藩主宗義功公の代に至
り、時の儒学者満山雷夏(一七三六
〜一七九〇)は、人材養成の必要な
ことを通論し、「いまだ対馬藩に
上級学校の設置なきは本藩の闕典で

ある。」旨を建議したのである。

藩主宗義功公は、この満山雷夏の
建議を採り上げられ、天明八年(一
七八八)四月六日国老古川図書暢往
に命じて、満山雷夏を講師とし、小
学校を修了した十五歳以上の藩士の
子弟を対象に、府中国分町の客館を
仮校舎として、藩立の上級学校「講
学所」での教育が動き始めたのであ
る。そして一ヶ月後には、朝鮮訳官
の来島によって金石城内に教場が移
り「講学方」と改称し、上級教育が
継続されていくのである。

この天明の時代は、蘭学を中心
に外国文化の移入を促進した時期でも
あるが、一方国内では飢饉米価騰貴
等による民衆の蜂起が各地に見られ
政治改革が求められる時勢でもあつ
た。勿論対馬藩も他藩同様、不況の
波が周期的に押し寄せ藩財政を極度
に圧迫していた。然し人材の育成こ
そは将来対馬の発展に最も貢献する
という宗義功公の英断が、上級学校
思文館の誕生となったのである。

宗家文書「毎日記」天明八年五月

二十日の条には、講学方の学規が次のように記されている。

満山右内

右ハ兼而被仰付置候読書指南南方之儀、是迄御使屋ニ而致指南候形を以於御屋形、早々相始候様被仰付候処、右ニ付委細書付を以伺出候品有之候付、先左之通被仰付候

一、志学中読書導方者延喜令式之読書例を相用可申候

一、志学中座順之儀御奉公をいたし候御家中三格を三ツに分……

一、志学中精不精吟味方ニ付、奥表御目付之内ハ一人日々御屋形江罷出候様、被仰付候間……

一、入学初心之人素読辺之義者不及申、文義も書面一ト通り之儀者、

一、同室内之先輩方大小身ニ不限引入候様可取計候……先輩之銘々無遠慮指南有之様申伝……

一、経術指南之人御仕立方之儀……

一、書物之儀追々御調拝借可被仰付候、御文庫ニ御在合之分……

一、毎日四ツ時ハ八ツ時迄之間を讀書之刻限ニ相定右刻限之内者他之

芸術稽古方を相止読書一篇掛り……無懈怠様ニ可致出精候

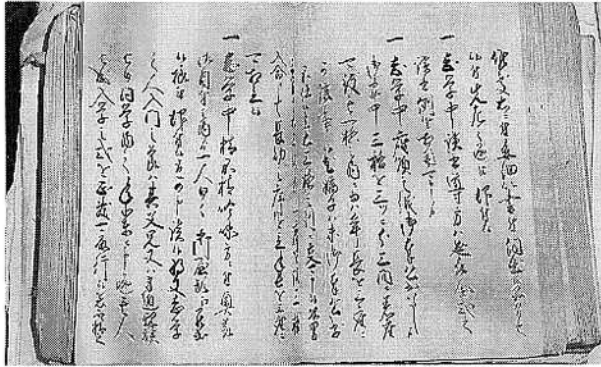
右者此節申出候品ニ付先右之形ニ被仰付候間入学之面々江申伝懇ニ相

導候様可仕之旨右内江可被申渡候

五月廿日

年寄中

思文館の学頭満山雷夏は、元文元年（一七三六）対馬府中に生れ、幼時より句読を父に受け一七歳で雨森芳洲に師事する。師の没後、独学で古学を究め获生徂徠の説を奉じ、対



馬に古学を始めた草分けである。

雷夏は訓詁学に拘泥せず、努めて大義を明らかにし、子弟の自奮に待ちその天分に從って、夫々の材器を伸ばす教育方法をとった。土君子より婦女童幼に至るまで、悦んで門を叩いて教えを聞いたのであった。

嘗て、雷夏の門に学んだ者には名族が多い。前述した古川図書、大森繁右衛門や農政振興に功ありのち田代に藩学東明館を設立した中村郷左衛門がいた。大森繁右衛門が連判に昇進した時、雷夏は次の一句を贈って祝詞に代えたという。

「登るほどおもりをつける風幟」

雷夏は教授に従事すること二十有余年、門下多士済々の評がある。寛政二年八月四日歿す。享年五十五、著書には宗氏世系私記（島史）・佩文緒言（島政治経済意見書）がある。寛政元年（一七八九）六月藩主宗

義功公の時に、武道稽古のため講武場（家形）は、藩主の別荘を修理拡張して開館している。右道場建設の達に「近年武芸相励候人多相聞候処、稽古場所無之雨中等心不成怠り候由相聞候……小阿須御茶屋を被解武術之稽古場御設被下云々」とあって、藩主の厚き思召に家士達が感激歎喜し、二百余人が夜まで協力労務に服し忽ち建組に至った記録がある。古

来より対馬は防備の島であっただけにかかる意気込みで若侍達が腕を磨き心を練り上げたであろう。

そうして、幕末の元治元年（一八六四）対馬藩に日新館が創立され、主として文武興隆並びに尊王攘夷思想の教育が行われた。思文館はこの時点で日新館に併合されたが、九ヶ月足らずで廃館となり再び思文館は独立した。五年後の明治二年（一八六九）藩立学校として、小学校と共に新しい歩みを続けたのである。

明治五年八月学制が發布され、藩立学校は明治六年二月廃校となった。回顧すれば、貞享二年（一六八五）創立の小学校は百八十八年、思文館は八十五年間の歳月を以て、終りを告げたのである。

平成五年度職員一覽

館長(兼)	中山恒夫
事務吏員(兼)	阿比留徳生
指導主事(兼)	山田賢治
研究員	大島精一
研究員	三浦忠和
事務嘱託	椎葉徳子